机と布団と女

坂口安吾

小説新潮の新年号に、林忠彦の撮影した私の二年ほど掃除をしたことのない書斎の写真が載ったから、行く先々で、あの部屋のことをきかれて、うるさい。しょっちゅうウチへ遊びにきていた人々も、あの部屋を知ってる人はないのだから、ほんとに在るんですか、見せて下さい、と云う。見世物じゃないよ。

林忠彦は私と数年来の飲み仲間で、彼は銀座のルパンという酒場を事務所代りにしているから、そこで飲む私と自然カンタン相照らした次第で、このルパンでも、彼は四五枚、私を撮（うつ）した筈である。小説新潮の太宰治の酔っ払った写真もこゝで撮したものだ。

ルパンで撮した私の四五枚のうちに、一枚、凄い色男に出来上ったのがあり、全然別人の観があるから、私はこの上もなく喜んで、爾来この一枚をもって私の写真の決定版にするから、と林君にたのんで、たくさん焼増ししてもらった。

私は写真にうつされるのがキライである。とりすますから、いやだ。それで、新聞雑誌社から写真をうつさせてくれと来るたびに、イヤ、ちゃんと撮してあるから、それを配給致そう、と云って、例の色男を配給してやる仕組みにしている。

林忠彦は、これが気に入らない。あれは全然似てい

ないよ。坂口さんはあんな色男じゃないよ。第一、感じが違うんだ、と云って、ぜひ、もう一枚うつさせろ、私は彼の言い方が甚だ気に入らないのだけれども、衆寡敵せず、なぜなら、色男の写真が全然別人だというのは定説だからで、じゃアいずれグデングデンに酔っ払って意識せざる時に撮させてあげると約束を結んでいたのである。

ところが彼は奇襲作戦によって、突如として私の自宅を襲い、物も言わず助手と共に撮影の用意をはじめ、呆気にとられている私に、

「坂口さん、この写真機はね、特別の（何というのだ

か忘れたが）ヤツで、坂口さん以外の人は、こんな凄いヤツを使いやしないんですよ。今日は特別に、この飛び切りの、とっときの、秘蔵の」

と、有りがたそうな呪文をブツブツ呟きながら、組み立てゝ、

「さア、坂口さん、書斎へ行きましょう。書斎へ坐って下さい。私は今日は原稿紙に向ってジッと睨んでいるところを撮しに来たんですから」

彼は、私の書斎が二ヶ年間掃除をしたことのない秘密の部屋だということなどは知らないのである。

彼はすでに思い決しているのだから、こうなると、

私もまったく真珠湾で、ふせぐ手がない。二階へ上る。書斎の唐紙をあけると、さすがの林忠彦先生も、にわかに中には這入られず、唸りをあげてしまった。

彼は然し、写真の気違いである。彼は書斎を一目見て、これだ！　と叫んだ。

「坂口さん、これだ！　今日は日本一の写真をうつす。一目で、カンがあるもんですよ。ちょッと下へ行って下さい。支度ができたら呼びに行きますから」

と、にわかに勇み立って、自分のアトリエみたいに心得て、私を追いだしてしまった。写真機のすえつけを終り、照明の用意を完了して、私をよびにきて、三

枚うつした。右、正面、その正面が、小説新潮の写真である。

昨日、未知の人から、こんな年賀状をもらった。

新年おめでとうございます。

どうも先生は私より二十何年か先輩でありますから、大兄もヘンだし、安吾さんもおかしい。失礼と存じまして、先生と呼んだんで、根が小心者なので、呼び方から、おッかなびっくり、然し今日は二十三年の一月二日、大変よい日と思いましたのは、書きぞめの日だからであります。

先生の作品はだいたいに私の気持と共通し、安吾も

なかなかヤリおるると深い感動に打たれておりますが、まだいくつも読んでいません。なぜなら、雑誌二十円は高い。単行本にまとめて読んでやろうと思っていると、七十円八十円では、私はルンペンだから手が出ず、借りて読むという手があるから、マア、だいたい読んでる次第です。(中略)

しかし、先生は正直ですね。おだてるのではないが、全く、正直ですよ。そのショウコが、昨年三十一日、私は小説新潮を見ました。モウレツな勢いで机に向っているのが出ていました。写真がですよ。机の四方が紙クズだらけで、フトンもしきっぱなしになってまし

た。

私は見ているうちにニヤニヤしました。やってるな、なかなか、いいぞ。あのフトンの上に女の一人も寝ころばしておけば、まア満点というもんだが、安吾もそこまで手が廻らんと見える。けれども、とにかくいいぞ。度の強い眼鏡の中の鋭い目玉、女たらし然と威張った色男。ちょッといけますな。この意気、この意気。

先生の小説が騒々しいのによく似てる。ガサツな奴は往々にして孤独をかくしているという、それなんですね、先生は。

あれは天下一品の写真だから買おうと思いましたが、二十円だから、やめました。いやどうも失礼なることを書きならべ申訳ありません。（下略）

この手紙の主は、東北の山奥の住人で、二十前後、どうも十八ぐらいの年齢じゃないかと思われる。

フトンの上に女の一人も寝ころばしておけばマア満点だというところなど、アッパレな着眼で、山奥の小僧とは思われぬ小憎らしいところがあるが、先日、浅草でドサ廻りの役者からきいた話でも、目下田舎へ行くほど新風が流行しているということで、東京のアベックはテレくさそうに腕を組んで歩いているが、田

舎のアンチャンはケタちがいに新風だということだ。芝居の客席を暗くして、芝居の見物よりも、御自分の演技の方にいそがしい、そういう新風が流行しているそうだから、この山奥の小僧の着眼は、私の目には新風だが、山奥では当りまえなのかも知れない。然し、そんな山奥まで、この写真が物議をかもしているようでは、私もいさゝかてれざるを得ない。

底本：「坂口安吾全集　06」筑摩書房
１９９８（平成10）年７月20日初版第1刷発行
底本の親本：「マダム　創刊号」マダム出版社
１９４８（昭和23）年２月１日発行
初出：「マダム　創刊号」マダム出版社
１９４８（昭和23）年２月１日発行
※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。
入力：tatsuki
校正：小林繁雄
２００７年2月22日作成